米子労音「河野克典」リサイタル　曲目解説

山田　耕作（1886－1965）

　１９０８年に東京音楽学校の声楽科を卒業し、その後ドイツに渡り、ベルリン国立高等音楽学校に留学。１９１４年に帰国し「東京フィルハーモニー管弦楽団」を組織する。また、日本の芸術歌曲としての分野を明確に認識させた作曲家。

「この道」

　北原白秋（1883－1942）の詩に山田耕作が作曲した歌。このコンビによる童謡、唱歌にはたくさんの名作がありますが、これはその中の代表的な名歌のひとつです。アカシアの花、白い時計台といった歌詞から北海道のイメージがすぐに浮かびますが、白秋が札幌を訪れたときの印象が取り入れられていると言われたています。詩は１９２６年、曲のほうは１９２７年の発表です。

「鐘が鳴ります」

　白秋と耕作の二人が情熱的に意気投合して次々と新作を発表していた頃の作品。１９２3年（大正 12 年）に作曲されました。ピアノの前奏の始まるところに「ゆるき民謡の流れにのりて」と書き込まれています。弱音（ppp）で奏される和音が遠い鐘の音のようにひびきます。民謡風な５音音階による夕ぐれの叙情と恋人を待つ切ない感情を美しく歌い上げています。

「待ちぼうけ」

　１９２３年作曲。中国には「依株待兎」という諺があります。急にとびだしてきた兎が切株にぶつかり、そばにいた男は何の苦労もなくその兎を捕まえることができました。それ以来、男は毎日のようにそこで兎がぶつかるのを待っていましたが、結局は待ちぼうけに終わり、とうとう畑は荒れ果ててしまいましたという内容で、この諺をもとに北原白秋が詩を書きました。教育臭など少しも感じられないのん気でゆかいな歌で、コミカルに歌われています。

「赤とんぼ」

　三木露風（1889－1964）の詩に、山田耕作が１９２７年に作曲した歌で、美しいメロディーが聴く人の胸をうち、幼い日のノスタルジーをよみがえらせてくれる名曲といえます。

信時　潔（1887－1965）

　日本の歌曲の原点というべき「荒城の月」を書いた瀧廉太郎につづいて瀧の播いた種をみのらせ日本に西洋音階による芸術歌曲としてのジャンルを確立させたのは山田耕作と信

時潔の二人です。戦争中歌われた「海行かば」は彼の作曲。

「鴉」

国文学者、清水重道の詩による歌曲集「沙羅」の中の一曲。信時歌曲を代表する作品で枯淡な味わいはあらゆる虚飾をかなぐり捨てて歌そのものの本質に眼を向けた味わい深い歌曲。「狂言唄風に」と書かれているユーモアとペーソスのある歌です。

シューベルト　音楽に寄す

シューベルト（1797－1828）の最も親しい友人のひとり、フランツ・フォン・ショーバーの詩により、１８１７年シューベルト２０歳のときに作曲されました。全部で 12 曲あるショーバー歌曲の中で広く知られている唯一の作品です。“本質的に祈りである”と評されているように純粋な、内面的な感動に満ち、シューベルトの最も精神的な歌曲のひとつとして詩人との友情の不朽の記念碑となっています。

（訳詩）

・心やさしい芸術よ、この世のおぞましい日常が
・私を覆い包んだあの数知れぬ灰色の時間に
・お前は私の心を温かい愛にもえあがらせ、
・よりよい世界に誘っておくれだった！

・しばしばお前の竪琴から流れ出る吐息が
　甘い、浄らかな和音をひびかせながら、
・この世ならぬ世界を私の頭上にひらいた
　心やさしい芸術よ、私はそのことをお前に感謝する!

シューベルト　菩提樹

シューベルトは、死の前年、歌曲集「冬の旅」を書きました。ひとりの若者が、失意の中、あてどもなく旅をしてゆく。１曲 1 曲が、絶望と希望のまじった心象風景となっています。あまりにつらい内容なので、当時よき理解者だった友人でさえ「5 番目の“菩提樹”だけが良かった」と言ったそうです。さわやかな葉ずれのような伴奏で始まり、「戸口の前の泉のほとりに、菩提樹が一本立っていた。」時を経て、旅人はその枝のざわめきを心に聴いています。

シューベルト　ます

シューベルト２０歳の時の作品で、詩はドイツ・ロマン派の詩人シューバルトによります。シューベルト自身も、おそらくこの作品を気に入っていたのでしょう。のちにピアノ五重奏曲（その名も「ます」）の第４楽章に変奏曲の主題として引用しています。曲は非常

に明るく朗らかで、清らかな川の流れに乗ってますが飛び跳ねながら泳ぐ情景を思わせます。

シューベルト　魔王

　ゲーテの詩による歌曲で、シューベルトの「作品１」として最初に世に送り出された作品。独唱曲として書かれており、歌手はひとりで魔王をはじめ父と子、そして語り手の４役を演じ分けなければいけません。漆黒の闇の中を馬が駆けていくかのような中音域の 3 連符に始まり、早くも冒頭から魔王に対する恐怖心があおられます。

ロッシーニ　歌劇「セビリアの理髪師」より「私は町のなんでも屋」

　１８１６年にローマで初演された「セビリアの理髪師」はジョアキーノ・ロッシーニ（1792－1868）が作曲したオペラの中でも最も人気が高く、上演回数の多い作品です。ヒロインのロジーナが、フィガロの助けを得て、後見人バルトロの邪魔をかわし、愛するアルマヴィーヴァ伯爵と結ばれるというストーリーで、モーツァルト作曲「フィガロの結婚」に先行する内容です。第１幕第１場で歌われる「私は町のなんでも屋」はフィガロのの登場のカヴァティーナで、バリトンの高音域を使って明るく快活に歌われ、陽気で機知に富んだフィガロのキャラクターがよく表わされています。

モーツァルト　　歌劇「ドン・ジョヴァンニ」より「カタログの歌」

　１７８９年、モーツァルト３３歳の折にプラハで初演された２幕の歌劇ドン・ジョヴァンニ。ドン・ジョヴァンニはイタリア語ですが、日本でなじみの深い言葉でいえばドン・ファンのこと。カタログの歌は第１幕、第４場でドン・ジョヴァンニの従者（テノール）によって歌われるアリア、カタログというのはドン・ジョヴァンニの恋の相手となった女性の名簿のことです。歌の前半のアレグロ部分では“イタリアでは６４０、ドイツでは２３１・・”などと女性の数を早口で数え上げます。後半ではアンダンテにテンポを緩め、“金髪の女は美しい、茶色の女は貞淑・・・”などと歌いあげますが、最後は“女であればだれでもいい”などと、とんでもない歌詞で終わります。

ワーグナー　歌劇「タンホイザー」より「夕星の歌」

　１８４５年、ワーグナー３２歳の折にドレスデンで初演された３幕の歌劇タンホイザー。騎士であり吟遊詩人でもあるタンホイザーの恋人エリーザベトはタンホイザーに裏切られながらも彼の救済を願っていますが死期が近づいています。タンホイザーの友人で密かにエリーザベトを慕うヴァルフラムが夕星（宵の明星すなわち金星）に向かって竪琴を弾きながら“天国の天使となる彼女の行く道を照らせ”と歌うのが夕星の歌です。